

# 「紀州漁業絵巻写」にみる漁撈活動

## ハマチ網漁

当館所蔵の「紀州漁業絵巻写」は、明治期の制作と考えられ、紀州で行われている伝統漁法を色彩豊かに描いた絵図を中心に、漁具、特に網等の細部を図面化し、それらの解説を付した、全長約二十三・二メートルに及ぶものです。

この原本は、明治期に行われた内国博覧会等に出展する為に作成されたものであり、上下二巻のものでしたが、当館では上巻の写しのみ収蔵されています。当資料の巻頭に付された「序言」には、「本書編纂八博覧会出品奨[虫損]ヲ以テ実業者ニ就キ聞キ得タル所ヲ記(後略)」とあり、当時、博覧会出展の為、現地での聞き書きをし、調査をした旨が記されています。

さて、内容は、一号から九号までの九種類に及ぶ漁法や網等の漁具を紹介しており、それは以下のものです。

第一号	ボケ網	第二号	豎網又は掛網	第三号	ハマチ網
第四号	縛網	第五号	枅網	第六号	中高、アングリ
第七号	鰯漁敷網	第八号	ゴツソリ網又はツル網	第九号	ワラ網

これら九種類の漁法は、和歌山県内のどの地域で行われていたのかが記されていません。しかしながら、第三号のハマチ網は、日高郡の海岸線で広く行われていた地引網漁とよく似ており、なかでも日高郡和田浦煙樹ヶ浜では、ハマチ地引網も盛んであったため、当地で行われたハマチ地引網であると判明しました。その様子は『紀伊国名所図会』にも紹介されています。今回は、ハマチ網を中心に紹介し、表現豊かに描かれている漁撈活動を現地で伝承されている話と共に見ていきましょう。

『美浜町史』及び現地での聞き取りによると、この漁法は、大きな網で魚群を取り囲み、陸地から引揚げるのが特徴であり、大型の網が必要であったとのこと。その網を所有する親方を網元と呼び、それぞれ漁師は、網子として、一村に数人いた網元の一人に雇われていました。役割は身分、年齢に応じて決められ、例えば、山番または魚見といわれる見張り役を少年、又は老人が勤め、魚場がよく見渡せる高台から、ハマチの魚群が接近するのを待ちました。いざ魚群が接近すると、鉦や太鼓、狼煙といった通信手段を用い、浜辺に待機する網舟に知らせ、それと同時にコツと呼ばれる触れ役が、各戸の雨戸を叩いて廻り、網を曳く曳子を集めました。網船は、二艘一組であり、二艘が寄り添って大きな一つの網を両船にまたがって載せていました。網は一つですが、沖から浜に向かって右側の船に載せている網を真網、左側の船の網は逆網と呼び、網の左右の名称が異なっていました。その網を沖から魚群を囲むように網の真中から下ろし出し、網船二艘が、二手に分かれて浜を目指す、双手という手法を用い、魚群を囲い込み、浜に待機する曳子に網の両端である袖網を委ねます。また、この網の張り具合を手直しする伝馬船も数艘有りました。網に囲まれたハマチの魚群は、アラテというワラやシュロ、アサで編まれた網の両サイドに阻まれ、フクロという綿糸で編まれた網の最奥部に集まります。浜では、老若男女問わず、大型の口クロを用いて網を曳きます。まさに当資料は、この光景を描いているわけです。この大型の口クロは移動が可能であり、材質はヒノキとマツを用いました。巻き棒と呼ばれる手押しの棒を八本に増やし、より多くの人が回せるように工夫した幕末期における画期的な発明でした。これを考案したのが、日高郡浜ノ瀬浦の網元であり、地引網漁の改良に苦心した福田六太夫であるといわれています。

水揚げされたハマチは、役割に応じて分配され、女性達によって近隣の村々に売り歩かれました。これをボテ売りといって、天秤棒での振り売りのボウテフリが訛ったものです。海から離れた農村部の人達にとってボテ売りは待ち遠しいもので、昭和中期まではよく見られた光景です。また一方、『紀伊国名所図会』には、大量に獲れるハマチを大阪堺、兵庫付近まで、出荷していた旨が記されており、ハマチの消費は近郊に留まらず、都市にまで及び、その市場の広さを物語っています。

当資料は、かつての生業形態を明らかにし、現在では廃れてしまった当時の漁撈活動及び人々の生活を知る上で、大変貴重なものです。

(文責：裏 直記)